

エコロジカルな生活ができるコミュニティ



ごみっと 116号
(2016年9月発行)で

ご紹介したエネルギー自給村シュタイヤーベルクには、レーベンスガルデン(人生の庭)と呼ばれるエコロジカルなコミュニティがある。

村とは関係ない独立した組織で、自然との共存やパーマカルチャー注1などオルタナティブなライフスタイルを求める人たちが集まり、1980年代に生まれた。

約200人が住んでおり、有機農法で野菜を育て、製本など手作業ができる場所がある。住人は一般企業に通っていたり、ITを使って在宅で仕事をする人などさまざま。野菜や卵売り場は無人で、箱に料金を入れるしくみになっている。建物にはソーラーパネルが載っていたり、敷地内には電気自動車のカーシェアリングがある。互いにかかわり合いながら助け合う生活空間となっており、忙しすぎる一般社会とは違った時間が流れている。

実はレーベンスガルデンの建物は、戦前ナチス政権下で強制労働さ

せられていた人々の住居だった。いまではさまざまなセミナーが開催され、宿泊施設も完備し、全国から多くの人が訪れている。

その敷地に3月3日「トランスフォーメーション(変容)36」という家がオープンした。これもセミナーの一環で、作業キッチン、セラピー室、ワーキングスペースがある。

一階の作業キッチンではオーガニックショップからもらってきた売れ残りの野菜や果物をジャムやピクルスなどに加工する。肉や魚、卵、乳製品などは扱わない、いわゆるビーガン(Vegan)注2である。まずコミュニティ内で販売し、いずれは近隣でも販売していく予定だ。

2階のワーキングスペースでは、コンピュータ仕事などができる。セラピー室はヨガなどリラックする場所であり、仕事ではなく自分のために何かをするスペースとしている。3階に共同キッチンがあり、屋根裏に部屋がふたつ。男女に別れて、2人ずつ居住できる。

「トランスフォーメーション(変容)36」の滞在期間は1~3ヶ月と限定されており、コミュニティに興味を



共同生活をするマティアスとジェームス

持っている人が生活しながらレーベンスガーデンのコンセプトを実践できるため人気がでそうだ。

現実には疲れた人や、これまでの生活を見直したい人にもよいかも。住み始めたばかりのマティアスとジェームスは「いずれは台所作業を通して、家賃や光熱費を払えるようにしたい」と話し、新生活に意欲を見せている。

注1: パーマネント(永続性)と農業、文化を組み合わせた言葉。持続可能な農業をもとに持続可能な文化、つまり人と自然が共に豊かになるような関係を築いていくためのデザイン手法。

注2: 絶対肉食主義。動物製品を使用しない生活様式。程度によって、肉・魚・卵・牛乳など食品だけを受け入れない人や、毛皮・皮革・ウールなどの生活用品をも拒否する人もいる。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRAの成長記録

1月末に5年生の前期が終わり、学校から「成績がよかったですよ」と電話がありました。総合点が一定以上だと飛び級できる制度になっているそうで、びっくり。しかし先生は「2月から6年生に移ったら、フランス語の最初の半年を逃したことになるからお勧めしない」とのこと。

留年があるのだから飛び級もあるのだけど、飛び級した分はひとりで勉強しないといけません。しかもクラス30人中3人が飛び級可とは、ちと多すぎない?

明は母国語授業のギリシア語と日本語がよかったこともあり(母国語授業はおまけみたいなものだから先生が甘い)、生まれて初めてクラスで1番になり鼻高々。これまで成績なんて気にしてなかったのに「いい成績取りたくなっ

た」と目覚めたみたい。

一方、小学校で仲良くしていた友達は成績

優秀だったのに、カトリック系の厳しい学校に入り苦戦しているらしい。偏差値での格付けはないけど、やはり学校によってレベルの違いはあるようです。

ちなみに明は声が高いので、クラスでヘリウムくんと呼ばれている(ヘリウムを吸うと声が高くなる)。いつも鼻くそをほじっているのが嫌われている男の子は、学級の時間にそのことが取り上げられてその子は泣き、先生が「人を傷つけるテーマをとりあげてはいけない」と怒ったとか。5年生ってまだまだ楽しそうだなー。結局、誰も飛び級しませんでした。

